

俳人成田千空研究会

千空研究

第6号

ふかうら文学館 千空の間

2004年、深浦町に「ふかうら文学館」が開館した。太宰治の間・大町桂月の間・成田千空の間に設けられ、それぞれの資料が展示されている。写真はオープニングに出席し



た千空さんと市子夫人。

太宰の宿と銘打っているように、太宰治が小説「津軽」取材の際に宿泊した秋田屋旅館を改修したもの。

看板の下に、太宰治の間、大町桂月の間と読めるが、「成田千空の間」はご本人の陰になつて読めない。生存者として文学館入りを果たした、千空さんのはにかみであらうか。第2号で紹介した「千空さんの書斎」は、千空の間に再現されていて、千空さんが居そうな雰囲気。行合崎の句碑で撮影された映像で、千空さんの声も聞ける。目玉は収蔵されている100枚の色紙・短冊。

目次

ふかうら文学館 千空の間

千空、最初の句集『海流』

〈回想の成田千空〉

「件」の人たち

草野 力丸

父・米田一穂と千空

米田省三

青森萬緑会通信句会誌『未来』を中心として(5)

千空俳句の礎(4)

西谷ともえ

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(5)

青森県文芸協会と成田千空(続) 齋藤 美穂

〈千空点描〉若山牧水の杯で吞む

〈作品鑑賞を読む〉

病む母のひらがな言葉露の音 神林 信一

〈成田千空資料再録〉⑥

寄贈感謝・会員名簿・北極星

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

千空、最初の句集『海流』

千空の初句集は昭和19年12月、青森俳句会発行の『海流』である。千空23歳のことである。

ふしぎなことにこの句集には、ページ数もなければ、序文やあとがきや奥付がない。表紙に「句集海流」の題箋が貼られ、扉に題名と青森俳句会の名があるだけ、次いで出句者33名の名が順不同で挙げられている。本文はそれぞれ見開きで、句題もなく10句ずつ掲載されている。

千空句のうち、第2句の上五は、「雪切りし街」となっているが、初出の『寂光』（昭和18年6月号）および『千空句帖』（昭和20年ごろと推定）では「雪切りし衢」となっているの



で、誤記の可能性がある。

岩木嶺の巨きく手毬唄やさし
雪切りし街洞然と寝しづまり
白鳥の啼かんとす頸ほそりけり
鯁船入りつぐ海の盛りあがり
家ぬちの柱が光り夏來たる
佞武多見る人の歩みにしたがへり
晩涼の鶏の眼青き光りあり
頬かむり皆眞白なる豊の秋
颯風や街がつしりと組みあへる
時雨寒菜の青々とゆであがり



『青森県俳句年鑑』1981年版「句集『海流』について」には、昭和19年12月、物資不足のなか吹田孤蓬が中心になって発行したもので、題字は西田山草の筆とある。

刷した35丁を、四ツ目綴じの和本仕立てにしている。B5判より小さく240×170^ミである。

なぜ、奥付を外したのだろうかという疑問が残る。代表の孤蓬は京大出身の中学教師であり、本の知識がなかったわけではない。考えられるのは、戦時下に句集を作れば警察の取調べを受ける可能性があり、これを避けるためだったのではあるまいか。千空の『俳句は遊びの文学』にも、「夜おそくまで句会をやっているの、特高警察にいらまされていたようです。孤蓬は一度特高に呼び出されて注意を受けましたが、逆に日本の俳句の良さを開陳して、警察の人達もぜひ俳句をつくるように薦めてきたそうです」とある。

今回、『海流』出句者の一人である尾崎西蕉さんから、刊行記念写真を寄贈していただいた。裏には「昭和十九年十二月、於孤蓬居」とあり、全員の名が記されている。みんなの前には出来たばかりの句集が積まれ日本酒が二本並んでいる。紙も酒も統制だったし、写真のフィルムや印画紙も手に入らない時代だった。どれだけの奔走で句集

や記念会が実現したことであろうか。会場は孤蓬と登美子夫人の新居だが、左下の破れ襖から敗戦直前の暮らしぶりが窺われる。
(佐々木達司)



句集海流刊行記念 前列右から、宮川翠雨、西澤赤子、齋藤草村、新岡青草、柿崎無為、福田空朗。中列、西田山草、長内幽思、田邊天涯、吹田孤蓬、千葉青實、高松光多朗。後列、吹田登美子、尾崎西蕉、黒瀧雨滴、成田千空、武田竜水、工藤折葉。

回想の成田千空

「件」の人たち

草野力丸

平成十七年、八月三日、九時二十分、けたたましく電話が鳴った。成田千空さんからだった。明日、車を出してくれないか。私を青森市まで連れて行って欲しいとのことだった。千空さんのことはなんでもきく。そんな関係が出来上がっていたのだった。

翌日車の中でそれとなく聞いたのだが、「件の会」の人たちが修学旅行にくるという。千空さんは件の会から「第一回みなづき賞」を受賞していた。「蛇笏賞」を既にもらっていたが、「みなづき賞」の受賞はとても嬉しかったらしい。何しろ、この賞は「件」の人たちが自腹をきって一人五万円ずつ出しあい、賞金五十万円を贈っている賞でみんなの魂が入っている特別な価値のある賞だと考えていたらしい。千空さんが住んでいる青森ってどんなところか見たいという話がまとまり、「件」の連衆がどっと押し寄せてきたのだった。「件の会」は超結社。その人たちはみな忙しい。ホウボウに散らばっている。来るにしても、列車も違う。時間も違う。といった按配だった。青森駅で黒田杏子・榎本好宏と合流し、車を駐車場に入れてから「ねぶた小屋」に足を運んだ。デッカイねぶたに仰天。好宏は写真をパチパチ

撮っていた。好宏はちょっと連絡を取ってくると言っていなくなった。一時間ほどしてから読売新聞の記者を連れて、戻って来た。記者は杏子にインタビューをしていた。後で知ったが好宏は読売新聞であちこちの選者を務め、読売に顔が利く大物だったのである。その後、棟方志功記念館に行ったような記憶があるが定かでない。

新町の目抜き通りにある高森ましらの家の前にパイプ椅子がずらりと並べられ特等席がつくられていた。どこからどう来たのか、ここでみんなが勢ぞろいしたらしい。みたこともない顔ばかり。千空さんが誇らしげに青森倭武多を説明していた。六時と言えはまだ明るい。酒とつまみが配られ宴たけなわの状態。やがて、地の底から響くような太鼓の音と、人間の津波のような跳人が現われた。灯が入り開眼したねぶたが眼前にやって来て、ギーンと音をたてながら、特等席に應えるようにそそり立つ。ねぶたの像は、「暫」などの歌舞伎や、「三国志」、「水滸伝」などの神話から想いを得て、倭武多師がつくったもの。百メートルほどの間隔でやって来る倭武多のあいだには、太鼓、笛、鉦が囃に合わせ、「ラッセラー、ラッセラー、ラッセ、ラッセ、ラッセラー」の勇ましい掛け声で跳ね回る跳人の群れに埋め尽くされる。みんなヤンヤの喝采。千空さんは、目を細め、白い睫毛をパチパチさせて喜んでいるのが印象的だった。

倭武多観戦を終えて五所川原の夢野温泉に到着したのは、十時を過ぎていたように思う。既に蒲団が敷かれていたが、蒲団をまくりあげ、車座になって俳句談義が始まった。杏子が姉御役を遺憾なく発揮。全国俳壇の展覧などに話が及んだ。横澤放川、好宏、橋本榮治、西村和子らが盛んに議

論を闘わしていた。一時を過ぎても止める気配はない。そのうちに眠気が襲い。堕ちてしまったらしい。気がついたら朝の七時だった。みんなはグースカグースカ気持ちよさそうに鼾をかきながら眠っていた。宿の女将に宿泊費を尋ねたら、千空さんが勘定済みとのことだった。

翌日、金木へ行くことになった。途中、たわわに捻りつつある林檎畑・太宰治の生家斜陽館・三味線会館・太宰治の文学碑などを見学し、正午から中村草田男句碑建立の現場において、千空さんはじめ、来賓として招かれた「件の会」の人々、萬緑関係者が次々と献花を行い、ホテルサンルートを会場に約四十名が参加して句会が催された。特選句は次の通りである。

成田千空選	入魂の跳人の鈴を拾ひけり	草野力丸
黒田杏子選	いしぶみは淋しきものよ蟬時雨	西村和子
榎本好宏選	あおもりにあをき沖あり草田男忌	成田千空
橋本榮治選	若き等のひかがみ美しき炎熱忌	南美智子
細谷曉々選	借景は白神の森草田男忌	木村政章
西村和子選	青田中真つ直ぐに来て炎熱忌	塩谷隆生
横澤放川選	この国にあり炎熱忌原爆忌	黒田杏子
北島大果選	炎天の息ととのへり献花せり	今泉陽子
福士光生選		

あおもりにあをき沖あり草田男忌 成田千空

夜は立佞武多を心ゆくまで堪能したらしい。

榎本好宏の著書「名句のふるさと」の一文を紹介する。

佞武多みな何を怒りて北の闇 成田千空

炎熱忌の行われた五日の夜は、これまた千空さんのお膳立てで、五所川原立佞武多を見せてもらった。こちらは弘前市と同様に「ねぶた」と読む。平成八年に復元された立佞武多は、身丈が二十三呎もある。青森市の佞武多と違い、文字通り手作りそのもの。席に配られた茹でた唐黍や枝豆にも、人の温かさが伝わる。……うんぬんと書いている。後で知ったことだが、玉蜀黍や枝豆の差し入れは、千空さんの市子夫人、ワンカップは木村政章が提供したものだ。

翌日、杏子、榮治、好宏、放川、和子、千空さん、市子、櫛引麗子、西谷是空、福士光生らが千畳敷海岸、千空句碑のある行合崎海岸などを散策した後、北前船の館を見学。食事処で息抜きをしてから「ふかうら文学館」に入館、千空の間、特別展「成田千空色紙展」を鑑賞。ふかうら文学館において句会が行われた。特選句は次の通りである。

成田千空選

末伏や岬鼻に波立ち上り

橋本榮治

黒田杏子選

帯なして跳人が角を曲りけり

榎本好宏

西村和子選

じつくりと息永々と北の蟬

横澤放川

榎本好宏選

八月の海の平らに我ら会ふ

福士光生選

放映みな業貫きて広島忌

西谷是空選

原爆の日やひらひらと杏子来る

草野力丸選

漂白すねぶたの光身に浴びて

黒田杏子

成田千空

草野力丸

福士光生



五所川原市、草田男炎熱碑前で（撮影 草野力丸）

前列左から、西村和子、成田千空、榎本好宏。
後列、黒田杏子、橋本榮治、横澤放川、北島大果。

千空さんは、よほど嬉しかったのであろう。

「よし、東能代まで見送りに行こう」と号令をかけたのだった。是空、麗子、力丸の自家用車三台に分乗して、「件」の一行を東能代（深浦→東能代）まで約八十キロメートルを走り、東能代駅で別れを惜しみながら手を振って再会を誓いあった。千空さんの嬉しそうな顔は今でも脳裡に焼き付いている。市子夫人は目に涙を浮かべていた。感謝、感激の気持ちでいっぱいだったに違いない。杏子、好宏は一行を見送った後、深浦に戻り、不老不死温泉で一泊した。アワビのステーキはお気に入りだったらしい。その夜も延々と俳句談義、私はただ黙って聞いていた。翌日、鱸作駅まで送り、五能線一番列車に乗車させた。五能線の普通列車に乗るのが目的だったらしい。

好宏の句集『祭詩』には、「件」の一行と、成田千空さんを訪ね青森へ 十六句の前書きがあり、この句集で俳人協会賞を受賞している。また、杏子の句集『日光月光』に鱸作、深浦、五所川原、佞武多の句などがたくさん収録されている。杏子はこの句集で蛇笏賞を受賞している。杏子は千空さんを尊敬していた。千空さんの葬儀にも参列し、弔辞を読んでいる。千空さんは、単に五所川原の千空さんではなく、全国に名を馳せた俳句界を代表する千空さんなのである。

* 千空は別格であるとの思いから敬称をつけた。
（青森県俳句懇話会事務局長／深浦町）

父・米田一穂と千空

青森萬緑会通信句会誌

「未来」を中心として (5)

米田省三

「現代俳句は現代の詩であると共にあくまでも俳句でなければならぬ、という命題が私の胸に宿ってから久しいが、いまだに満足な一句すら作れないでいる口惜しさをむしろ大事にしている昨今、俳壇における問題意識がどんどん進行し、衝突し、溝が生じはじめた様で、正直のところとまどいを感じている。とまどいといえ一昨年、「俳句」誌から動物についての俳句をたのまれて提出したところ、それが「前衛俳句」の特集号であったことが後でわかった。つまり私は所謂前衛俳人と目されていたわけである。そのわけは今でもよくわからない。はっきりいえば、所謂前衛俳句は現代俳句としての相当な実験だと私は思っているが、私自身所謂前衛俳人だと思いたためしが無い」

これは、昭和三十七年「萬緑」三月号に掲載された、成田千空の「向上と新化」の冒頭部分である。昭和三十年代前半から金子兜太が提唱した造型俳句を契機とし、前衛俳句対伝統俳句というのが俳壇の大きな対決の構図となるが、千空も一時その渦の中にいたと言ってよい。それは必ずしも俳壇の動きに巻き込まれたということではないが、密かに「俳」と「詩」の間で葛藤があった。

「今日を断ちわたしの前にあるレモン」。これは昭和三十五年五月発行の「未来」五四集に発表さ

れた句であるが、誌面でも各評者により評価がまちまちであった。従来の千空の句風とはかなり違った所謂実験作であったため、一言でいうと難解と映った。一穂は選評の中で、「千空氏の句は、その深い詩情は及ぶべくもないが、事象そのものは割合にわかっていたが、萬緑へ出句しなくなっ



写真

昭和五三年に手術、車いす生活に入って意気消沈していた父・一穂(左)を励まそうということ、わざわざ十和田市中央公民館で萬緑青森県支部大会を開催し、千空さんが五所川原から駆けつけてくれた時の写真です。昭和五四、五年頃。

としていることに若干の危惧を覚えている。千空の「萬緑」への投句は途絶えがちになり、「未来」へも選評はあるものの、出句はなくなっていく。おそらく千空の詩囊を豊かにする雌伏の時期であったろう。前衛と伝統派の対立は、昭和三十六年十月の現代俳句協会賞選考過程で顕在化し、現代俳句協会の分裂につながり、草田男は現代俳句協会の幹事長を辞し、有季定型を守る同志とともに俳人協会を発足させ初代会長となる。また、「俳句」昭和三十七年一月号では、金子兜太と往復書簡の形で前衛俳句を批判、一大論争となるが、そういう流れの中で千空の先述の文章を読んでみると、何か迷いが吹っ切れ、進むべき俳句の道をしっかり見定めたというような感じを受ける。この句作(発表)の途絶は、次のステップへの充電と捉えることができ、千空の後の俳句人生に最も大きな意味を持つ時期であったかと思う。なお、造型俳句の旗頭金子兜太は、昭和三十七年四月に「海程」創刊、秋には「暖鳥」同人徳差青良と龍飛崎を逍遥している。さらに、昭和四十年九月には「暖鳥」創刊二十周年記念大会に招かれ、県内の俳人と交歓した。言うまでもなく千空は兜太にも一目おかれる存在であり、後に昭和四十五年に戦後俳句作家シリーズが海程戦後俳句の会から出された際、『成田千空句集』もそのシリーズに加えられた。ちなみに、金子兜太が蛇笏賞を受賞したときの選考委員が千空であった。千空は既に受賞していた。

さて、「未来」であるが、本家の「萬緑」が遅刊、休刊が続く中、順調にいうか、むしろそれを補う形で発行されていた。選評は萬緑同人で、第五回角川俳句受賞の安立恭彦が献身的に担当

してくれ、投句者には大いに刺激になった。千空は、「未来」の編集について、句評はピックアップしたいいくつかの句について集中的に行うとか、「萬緑」を読む」というような欄を設けて、若手の勉強のために順に書かせるとか、いろいろ提案

「萬緑」支部誌としての主体性を強めることと同時に一般に開放することを、うまく一致させた（「未来」五三集、昭和三十五年四月）と述べている。そして、津軽地方では、「この度萬緑の津軽の青年会同志相談して毎月一回づつ俳句研究会を持つ事になりました」と、平山五朗から連絡があったことを「未来」五二集には掲載している。支部誌「未来」は、他県の萬緑人からも注目されるところとなり、「萬緑」の「僚誌僚評」のコーナーで、萬緑同人但馬美作が、よく継続して発行し続けていること、会員の熱意、各作品の質の高さ等指摘し、良き修練の場となっていると述べている。（「萬緑」昭和三十七年十月号）体裁についてであるが、相変わらずの自前のガリ版刷りであったが、原稿の締め切り等融通が効くということが大きなメリットで、そのことによって、多少の遅延はあれ、欠かさず毎月発行できたのである。

その「未来」も、八〇集という区切れのいいところで、編集を一穂から千空にバトンタッチすることになった。今、一穂の「未来引渡の挨拶」（「未来」八〇集、昭和三十八年一月）を見てみよう。

「次集から成田千空氏が未来を担当する事になった。これは、最近五所川原の新人の意欲が旺盛で、機を逸せず、この人達を伸ばして行きたい意向からである。事実、真から未来と取り組む事は、俳句の向上に大いに役立った事は私が身をもって証明した筈である。――中略――各位の批評から大い

に学ぶところがあって、いつの間にか自分というものを見出すことができた。その結果、萬緑同人に推され、夢にも考えていなかった萬緑賞をも受賞する事ができた。」

確かに自らガリ切りをし、毎月発行するというのは大変な労苦であったと思うが、それによって得られたものもまた大きかった。

萬緑のみならず他結社の参加も得ながら、三十名前後の会員を有した「未来」は、千空のお膝元に帰り、新たなスタートを切ることになったのである。（了）

（俳文学会会員／十和田市）

千空俳句の礎 (4)

西谷 ともえ

はじめに前号の拙稿「千空俳句の礎(3)」の訂正をお願いしたい。

青森俳句会の会誌「海流」について前号で「現在、青森県近代文学館蔵の昭和十五年五月刊行の創刊号と青森県立図書館蔵の昭和十七年十一月刊行の第三号の二冊（いずれもコピー）しか確認できないため、いつ頃まで、どのくらいのペースで刊行されていたか明らかではないが、昭和十七年十一月で三号であるから、実際には年一冊くらいだったのではないかと想像出来る。」と書いた。その後、昭和十七年十一月号の原本を青森県立図書

パソコンで「千空研究」が読める

「千空研究会」または「株式会社文芸印刷」で検索すると、会報のバックナンバーが読めます。

館で所蔵していた事がわかり、表紙、奥付、背表紙を確認し、「第三卷十一月号」であることが判明した。奥付には「毎月一回発行」と記されている。また、奥付ページにある「それから」という近況のコーナーに、「長谷川天更氏―横濱「洋」の主幹にして「海流」十月号の批評発表」とあり、十月号も発行されたことがわかった。

また、新谷ひろし氏は『暖鳥』物語―第一部（「暖鳥」四二―巻・昭和五七年一月号）に十七冊確認した旨記述している。先日新谷氏に電話で確認したところ、執筆当時、青森俳句会設立当初からの同人家でその十七冊（いずれも原本）を見せてもらったとのことであった。具体的に発行年、巻号は記憶にないが（青森県近代文学館にあるコピーはその時のもので、先日新谷氏から寄贈を受けたものである。）『暖鳥』物語―第一部では昭和十五年「7月に二号、9月に三号、11月に四号」を発行したとあり、「二十冊前後は刊行されたものと思われる」とまとめている。

つまり、昭和十五年に四巻発行され、十六年、十七年には毎月一巻ずつ発行されたとすれば、十七年十一月（第三卷十一月号）で二十七冊となり、新谷氏の考察とかけ離れたものではない。従って私の「実際には年一冊くらいだったのではないかと想像出来る。」は誤りであり、時折は発行できなかったこともあるが、月一回のペースを目標に昭和十七年までは発行されていたとみるべきで

ある。執筆時に新谷稿に当たれなかったことが最大の失敗であった。訂正してお詫びしたい。

さて、今回は、青森空襲の夜の句会について書きたい。昭和二十年七月二十八日深夜、青森市に焼夷弾の雨が振り注いだ。東北最大の被害をもたらしたとも言われる青森大空襲である。終戦まで僅か二週間だった。そんな日にも句会を開いていた人たちがいた。青森俳句会の「疎開残党の面々」である。その時の様子を『俳句は飲びの文学』に、こう書き記している。

「戦争も末期の、昭和二十年七月二十七日(ママ)夜、青森市はB29爆撃機の空襲を受けました。その五日前に、グラマン戦闘機の空襲があり、青函連絡船が全滅しました。ひしひしと戦争のおそろしさが迫っていたのですが、青森俳句会の例会は行われました。

さすがに出席者が少なく、八人ほど孤蓬宅に集まりました。ゲートルを巻き、防空頭巾を携えての句会でした。燈火管制のために電燈を黒い布で包んで、その下のわずかな光を頼りに、句稿を置き、顔を寄せ合つての句会でした。吹田孤蓬、宮川翠雨、西沢赤子、西田山草、福田空朗、吹田登美子、成田千空らでした。

句会がはじまって、夜も更けた頃、警戒警報のサイレンが鳴りはじめました。はるか彼方の警報でもいち早くキャッチするのが孤蓬でした。警戒警報はこれまでも何度か鳴っていますが、今日は危ないぞという彼の直感で、句会が解散となりました。真っ暗な街を走って、家に帰りつくつとすぐ、空襲警報が鳴りました。」

用紙不足から既に「海流」は発行できない状況

にあったが、「句会は活発に行われて」おり、「夜中の一時頃までなるのが普通」で、特高警察に睨まれていたというエピソードもエッセイに描かれている。

空襲の夜の句会については、参加したメンバーが語り継いできたが、活字になっているものは少ない。吹田孤蓬が東奥日報の取材に対し「赤子、菁実、千空らですが、青森空襲の夜も防空ずきんをかぶって、まだまだ大丈夫と句会開いていたんです。」と答えている(昭和五十八年二月一日付「あすなる随談」千空さんは「八人ほど」といって七人の名を挙げているので、孤蓬のインタビュから八人目は千葉菁実かと思われた。千葉は昭和四十三年四月発行の「暖鳥」通巻第二四六号の特集「思い出の暖鳥 創刊の頃」と題したエッセイを寄稿しているが、そこで空襲の夜の句会については工藤与志男の『青森県短歌俳句史』の引用に留めていることから、実際には句会には参加していなかったではとも思われる。また、新谷ひろしは『暖鳥』物語―第一部に「青森空襲の夜、句座を共にした者には負傷した者もなかった」としたうえで「西田山草が爆弾の直撃を受けて死んだ」と記している。「避難先の浅虫から米町の自宅に帰っていた山草はこの空襲に遭い、防空壕の中で直撃団を受け即死」したのだとまとめている。これは千空さんの記述と矛盾するところである。また、福田空朗がその場に自分と赤子、翠雨がいたことを「暖鳥創刊の頃I」(「暖鳥」通巻第347号)に記している他、千空さんの『地霊』出版記念会では千空さん、翠雨と一緒にその句会に参加していた仲間として紹介され、祝辞を述べている。あまりの混乱で、誰も正確なことを覚えていない

といったところであろう。しかし、千葉が前述の「思い出の暖鳥」の中で、空襲下でも句会を続ける「この執念が次に生まれる『暖鳥』の母胎であると思うし、以後の『暖鳥』を貫いている『一本の棒』のごときものであると信じる」といっているように、千空さんを含めた青森俳句会のメンバーにとって最も重要な一夜の思い出には違いない。

(青森県近代文学館文学専門主幹・副室長／青森市)

【千空点描】

若山牧水の杯で呑む

千空さんは大の酒好きだった。雑誌の「千空対談」でも、「年齢で声がかすれるが、酒があれば滑らかにいく」と言うので、毎回お銚子を前にしての対談となった。

歌人和田山蘭の次男現^{あきこ}さんのとき、大正5年に若山牧水が五所川原を訪れて呑んだという杯を見て、「これで一杯やりたいな」と言いだした。杯は和田家の家宝のようなもの。周りはハラハラしたが、現さんは、「いいですよ」と注いでくれた。口に含んだときの満足そうな顔は忘れがたい。

晩年は執筆中もちびりちびりやっていたよう^うで、「机の下にかくし酒があったの。アル中にならないか心配で……」と、市子夫人が嘆いた。

かくし酒神に見つかり北吹けり (未来)
千空さんの率直な句が、萬緑県支部誌に載っている。この神は山の神。 (佐)

— 永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(5) —

青森県文芸協会と成田千空(続)

齋藤 美穂

文芸全般を見渡す広い視野を持った文化人

二〇一三年(平成25)に青森県近代文学館で開催された企画展「成田千空」を通して、俳人という枠にとどまらない千空さんの存在を知った時の新鮮な驚きを私は忘れることができません。

青森県文芸協会の理事長としての歩みはそれを証明することになりました。雑誌『文芸あおもり』に残された千空さんの作品、選評、小論や対談は今となっては、千空研究の資料として他に代え難いものでもあります。

千空さんは俳句一筋に生き抜き、日本を代表する俳人として高く評価されました。その一筋の道はどこまでも続く揺るぎない道です。『文芸あおもり』をたどっていくと、千空さんと多くの会員の言葉によって、その道の景色が見えてくるような気がします。今号では文芸協会との関わりを具体的にご紹介しながら、理事長在任中の功績を明らかにしたいと思います。

『文芸あおもり』に残された千空著作目録は『千空研究』第一号に掲載されています

あおもり選書Ⅰ『人日』発行

千空さんは依頼に応じて作品を寄稿し、協会が創設した賞の選考やゼミナールの講師を務めるな

ど協会の活動に関わりました。理事長就任後の活動として注目されるのは全一三回に及んだ「千空対談」で、さまざまな分野で活躍する文化人と渡り合う有識者としての千空さんが注目に値することは前回書いた通りです。

千空さんの第一句集『地霊』発行(1976年)から数年が経過し、第二句集が待たれていました。千空さんの近くにいてその実力を知る佐々木達司さんは、〈句集を世に出して認められることが俳句の世界の実績となる。俳句雑誌に発表するだけでは「上手い俳句を作る人だね」で終わる。千空さんほどの実力がありながら、具体的な評価にいたらない現実とのギャップをなんとかして埋めたい〉との思いから、第二句集を文芸協会で刊行しようと思ひかけます。さてそれからというもの、佐々木さんは何度も原稿を催促することになりました。

千空さんには、句集出版の資金がない——そこで生まれたのが文芸協会の企画出版「あおもり選書」シリーズでした。第一回は『人日』、第二回は『地霊』(再版)です(1988年)。装丁は並製であるものの、高水準なレイアウトは、内容のすばらしさを際立たせました。装幀は協会の会員でもある画家の櫻庭利弘さんです。その結果、あおもり選書『人日』はその年、第二八回俳人協会賞を受賞しました。地方の一書肆が出版した句集の受賞は初めてのことであり、話題となりました。佐々木さんはそのとき『人日』の特装本を一〇〇部制作し、直筆の色紙額を付け、千空俳句の愛好者中心に販売した売上を出版資金へ回すなど、千空さんの句集を世に出すために知恵を絞ったといえます。文芸協会の二〇周年記念号の中で理事長として

千空さんは次のように述べています。

「昭和64年に出版した、成田千空句集『人日』は、第28回俳人協会賞を受賞。これは「あおもり選書Ⅰ」として出版した文芸協会の企画出版で、装幀・印刷・造本等出版物としても高い評価を受ける」「社会状況や文芸状況へのアピールを内在している。全体として商業主義を拒否した姿勢といつてよいであろう」(1990年一三四号「青森県文芸協会について」成田千空)

ここでは自身の句集出版や受賞の喜びよりも、客観的に協会の活動姿勢に言及しています。批判精神を失わず、地方独特の作品で地方文化を育てるという協会の方針は、千空さん自身が納得のいく方向であったと思います。

受賞の快挙が他の会員に大きな喜びをもたらしたことは言うまでもありません。

「協会出版部による成田千空句集『人日』の上梓を一つの切っ掛けとして、千空さんが、日本の成田千空へと止揚されていた過程は劇的でさえある」(2002年一四六号「私の文学人生」きしだみつお)

個々の努力だけでは動かないものが動き出した。俳人・成田千空の一步が文芸協会や会員と共に実現していくようで、目には見えない励みがジャンルを越えて会員にも広がったことでしょう。さて、県内外で評価される千空さんを間近で見てきた佐々木さんに、千空さんと受賞というものについてお尋ねしたことがあります。「俳句で認められて受賞することは嬉しいことではあったにちがいないが、それを自慢したり、言動が変わることはなかった。叙勲(1996年、勲五等瑞宝章)

の際は授与式を欠席し、以後その受賞についてふれたことはなかった。熟慮の末の選択だったと思う」と教えてくださいました。五所川原市の名譽市民に推された時「俳人で名譽市民はおそらく全国で初めてでしょう。千空の俳句がどういふものかわからないでしょうが、市議会が俳句というジャンルを認めたということ」「そういうことから、受賞の影響があちこちに出てくると思います」と後に語っていた千空さん。温顔の下にある覚悟を秘めた目は、俳句の行く末だけを見つめていたのです。

【作品鑑賞を読む】⑤

病む母のひらがな言葉露の音

言うまでもなく〈ことば〉には平仮名も片仮名もあるわけではない。だが、母の口から出る言葉は優しくしなやかで、文字にしたならばまさに平仮名といった感じである。ましてや病める母のそれであるから、ひときわ弱弱しくひびいたにちがいない。時たまたま、草木の葉に結んだ露がこぼれ落ちるかそけき音を耳にして、作者の秋冷感は一層強まったことだろう。〈露〉が人生のはかなさの譬に用いられることを考えると、作者の思いの切実さがよく判る。

〔現代秀句鑑賞〕神林信一『技能と技術』職業能力開発技術誌 1979年5月号

「蘇生——入院前後 一五四句——」

(2004年一五一号)

二〇〇三年八二歳の時、肺炎のため入院——それは、蛇笏賞や日本詩歌文学館賞などを次々と受賞し、俳句結社「萬緑」の代表に就任した二年後のことでした。退院後に千空さんから「入院もいいもんだ。俳句が二〇〇句できた」と聞き、佐々木さんはそれらをまとめて発表することをその場で提案しました。〈これまで二〇〇句もの千空俳句が一举に公表されたことはない。細切れに発表して作句の背景がばやけるより、「入院前後の作品」としてまとめた方が資料的価値も高いだろう〉と考えたのだそうです。これが作品群「蘇生」です。

人日や力をつくしめしを食ふ

文旦に齒のやうな種生えてゐる

下萌や試歩の右足左足

肉囁めとけふ大寒の患者食

快気わが弥生無辺の空を飛ぶ

「蘇生」一五四句については興味深いエピソードがあります。

「文芸あおもりに載った私の入院前後の俳句。一五四句ありますが、あれを読んだ野沢さんが、「あれは川柳ですな」って、そんなふうに言われるとショックなんだけど、そう言われればそうかな、と」(『双眸』15号所収 2005年 川柳双眸社)

日本の俳壇を代表する俳人・成田千空に面と向かって作品の感想を述べる場面を想像できずにいました。この会話の前段というものを『文芸あおもり』で見つけました。一九九四年を第一回として、俳句・川柳合同句会が行われ、文芸協会が後援しています。俳句と川柳の接近が話題になる

中、合同句会をしてお互いを確認することで、立場の違いも鮮明になるのではないかとといった試みだったそうです。この野心的な試みの結果が気に掛かるのですが、千空さんは「川柳は自由な発想で季語や切れ字にも束縛されない分、素材の範囲も広い。川柳は日本の貴重な文芸」という認識で川柳に対してたいへん理解がありました。それが俳句になろうと川柳になろうと、俳句も川柳もいいものを作ろうとすることが大切。俳詩という新しいジャンルが生まれるかもしれません」とまで発言されているのです。(『文芸あおもり』1995年一四二号「俳句と川柳」成田千空)

そこへ来て、例の場面です。文学を探究する者同士の信頼と自身が定めたジャンルへの愛着。実に興味深い場面ではないでしょうか。千空さんの大家ぶらない反応には驚きますが、この企画の意図するところは当たり、川柳・俳句双方の作家たちに大いに刺激を与えることとなりました。

こうしたことが実現するのも、文芸協会という舞台上に千空さんと千空さんが見込んだ人々が集まっていたからです。『双眸』を編集・発行する野沢省悟さんは一九九三年から『文芸あおもり』の編集長を務められています。成田理事長着任後に協会の役職に就いたメンバーは、ほとんど千空さんの一本釣りだと、佐々木さんは笑います。千空さんの基本的な考え方は「文芸協会の中心メンバーは大勢でなくともよく、むしろ文芸に対する確固たる考えのある人が十人いればよい。」とのこと、相応な人物だと思えば年齢やジャンルにこだわらず出版記念などの集まりにも招いたりしました。野沢さんもそのお一人なのです。

千空さんは二〇歳からの四年間、肺結核のため

に死と隣り合わせで過ごしました。戦争や大病を通して平和や生命の貴さを強く感じ、それは時代が変わっても揺るぎませんでした。俳句の道を精進し続ける俳人が晩年になり再び命を見つめて詠んだ作品群の価値を直感的に見逃さなかったのは、長くそばにいた佐々木さんだからこそではないでしょうか。そして文芸協会というつながりが作品掲載を可能にしました。俳句は二〇〇句全てが掲載されたわけではなく、千空さんの選句を経て一五四句となりました。最後の句集『十方吟』へはさらに選句されて二五句ほど。千空さんの俳句は人生そのものであることを、『文芸あおもり』の中ではより実感することができたのです。

蘇生は生命の吹き返しであると同時に、命と同等に進化し続ける千空俳句の吹き返しでもあるのでしょう。「あれは川柳ですね」と言われて「そういうわれればそうかも」と一考する千空さんにとって、俳句は道半ば——その謙虚な姿勢には誰しも感銘を受けるのではないでしょう。

郷土とともに歩む

昨年七月、資料調査のため五所川原市元町の千空さんの自宅を訪問しました。ご遺族のご協力を得て、青森県近代文学館の西谷ともえ先生、千空研究会代表の佐々木達司さんと私の三人で相当数の俳句雑誌や図書、関係資料を搬出しました。その際、小さな新聞記事の切り抜きが見つかりました。

それは東奥日報一九八〇年四月二一日付「成田氏が受賞 第一回県文芸協会賞」の記事でした。当時千空さんは五九歳。一九五三年三二歳で第一回萬緑賞を受賞して以来、句作と評論活動を行い

ながら俳句の道をひたすら探求し、ようやく第一句集を世に問うて四年が経っていました。褪色した記事と重なるように保管されていたのが、東奥日報一九七四年一月六日付「青森県文化論」という特集記事で、『異土の乞食』になすとても』と題された今官一の論説でした。

弘前市出身の小説家・今官一は短篇集『壁の花』により、青森県で初めて直木賞を受賞した作家です。長く活動拠点を東京に置いていましたが、病を得て故郷弘前に移住、しばらくぶりの故郷で言葉を取り戻し、人生の最後まで作家として全うしたという経歴を持ちます。その彼が記事の中で、芸術作品はそれを生んだ作者の「郷土」とは全く関係のないものだとなにに信じている、と述べているのです。自らは寡作ながら「不当に扱われるものを正当化するためにだけ作品を書く」という信念を貫いた今官一の記事を千空さんは手元に置いていたというわけです。

千空さんは文芸懇談会での講演「風土と俳句」（一九八六年一二九号）の中で、「私自身は風土俳人といわれることにさほど抵抗を感じませんが、ときには郷土色という面だけで見られることもあって、反発したり反省したりしています」と述べています。この二枚の新聞記事の存在は、風土に生き、そこから生まれる作品をいかに普遍的な文芸の域に押し上げていくのか呟吟した千空さんの自戒の護符であったのかもしれない。

千空さんが文芸協会の理事長として果たした数々の仕事を見ると、文学者に共通する課題を自ら確認し、メッセージを発信し続けたことがわかります。千空さんの実作に対する厳しい姿勢と郷土で同じ道を行く人々をあたたく励ます言葉が

会員にもたらしたものの大きさは計り知れません。「ジャンルを越えて県内の文筆人たちと話し合ったり、酒を酌み交わしたりする楽しみは無上のものではあった。とじこもりがちなジャンルからの開放に、自由な文学の世界を確かめあうよい機会であった」（一九九九年一四六号「三十周年に当たって」成田千空）

「文学を志す後輩に対しては分野を問わず常にあなたかく好意的に対されて、その姿勢は揺らぐことなかった」（二〇〇八年一五五号「志念の高さをつらぬかれた先生」歌人・福井緑）
千空さん亡き後に理事長を務められた歌人の福井緑さんの言葉に代表されるように、協会の会員からは千空さんの分け隔てのない人柄と文学に対する真摯な姿勢に対する敬意と謝辞が聞かれます。二〇〇七年の総会だよりには、これが最後となった千空さんの理事長挨拶が記録されています。

「文芸協会も39年を迎えた。私は今、ガンに侵されているがなんとか頑張っている。戦後青森県の文学状況の特集とした『文芸あおもり』は読み応えがあり、記録としても貴重なものである。文芸協会の発展のために皆さんの忌憚のないご意見をお願いしたい」

総会は千空さんが他界される三ヶ月余り前のことです。実質的な活動は、理事以下の実働部隊で推進される中、志高い運営の舵取りができる理事長の存在はどれほど心強いものであったでしょう。千空さんは俳句の道と同様に、青森県の文学を先導する文化人としても最後まで尽力されたことを、私たちは文芸協会の活動を通して知ることができ

成田千空資料再録 ⑥

【俳誌『暖鳥』】 続き

『内』なるもの

成田千空

B君、長いこと御ぶさたしてゐた。山奥へひつ込んで以來僕は毎日毎日それこそ蟲のやうに土にすがつてゐる。己れを鍛えるなどと、きざな事は云へたくないが、けれども一と鎌一と鎌ゆつくり打つてゐると、土の静けさに驚くことがある。小刻みに、あるへは大まかにざくざく鎌を入れると、足許へさらさらと土がくづれる。すると僕は殆んど無意識に自分の「内」なるものにたち歸つてゐる。土にも水にも空にも草にも、たまらない愛を感じるのだ。

演説口調になるやうでおかしいが、詩の泉は常にこの「内」なるものにこそ在るのだと僕は考へてゐる。これは古來、様々な人達によつてさまざまな言へ方で云はれて來たところのものだが、案外これをマスターしてゐる人が少ないのではないかと思ふがどうであらう。

吾々がふだん、いゝ氣になつて個性、個性といつてゐるものが、實は個性でも何でもなく、或る一つのポオズをとつた化け物に過ぎないといふ事に君は氣付く事がないかね。「まこと」のない個性などは有り得ないとすれば、その「まこと」が問題の中心になつてくる。

『格に入つて格を出る』といふ事の窮極を大いの人には個性を抜け出るといふ事のやうに解してゐるやうだが、僕はさうは思はない。眞に個性的なものをこそ格を出たものだと思ふのだ。斯ういふ言へ方はどうも誤解されるお

それがある。藝術上に於ける作意のもつ重大な意義を考へれば、この事はうなづかれると思ふのだが……。

稻妻や浪もて結へる秋津島

蕪村

斯ういふ作意が、作意として燃焼して、それを大きく包んでゐる眞の蕪村を、吾々は、この句の中に見る事が出來ないだらうか。

「個性は無限の存在である。無限のここを知らうとする者は愛のここを知らねばならぬ。ひとは愛において自己を純すいな創造的活動のうちに没するときはじめて自己の眞の個性を見出す」といふ、三木清の言葉に僕は力づけられる。

B君

僕はしばしば句會の席上で作つた句に、秀れたものを見出す。秘密があるのだ。あの、しんとした水を打つたやうな静寂は、それぞれ己れの「内」なるものに、たちかへつてゐる人々の發する氣韻に外ならないと考へられないかね。だから、きよろきよると花鳥へ眼を放つて、いゝ加減にまとめた句よりは少しは「まし」なものが出來たりするのだ。けれども、だからと言つて、花鳥へ眼を向ける事が無意味だといふ理由にはならない。それどころか、この「外」なる眼の修練を忘れたら最後、たちまちマンネリズムに陥るのだ。おぼえがないかね。松の事は松に、竹の事は竹に「習ふ態度にこそ俳句の藝術性が確立するのだ」と僕は常に考へる。小蕾のいはゆる「時々刻々に境涯のある俳句」を時々刻々に把握する場合、より敏なる「外」と、より靜なる「内」の調和なくしては不可能であらうと思ふ。危機はその一方に偏するところに在ると思ふのだ。

「邊境に矛を進める征夷大將軍」の氣概をもつて『黄旗』をうちなびかせた誓子の、悲劇的な一時期の行きづまりも、此處にあつた事を思へば恐しきは藝術だと言へたくなる。誓子の場合には「内」なるものの欠如から來た

スランプであつたが故に一層痛々しいものがあつた。けれども誓子には達人的な「眼」がある。最近の誓子を見たまへ。

○酸漿の一枝累々買ひもどる

○ゆく雁の眼に見えずしてとどまらず

○せりせりと薄氷杖のなすまゝに

などに見られる。この物かなしいまでの「内」なるものへの執着は、一體何を物語るものなのだから。

斯うなると「内」は俳句のいのちになつてくる。だからその「内」の修練は當然超術的な人間の修練に通ずると考へられてくる。

けれども又、くどいやうだが、「外」の重要性もそれに従つて増すと思ふのだ。ある人々は、その一頭だけをとつて「若い時には若い句をつくれ」などと言ふ。わかるけれども、それは例へば「郷土人は郷土俳句をつくれ」などといふ俗論と、どれだけの違ひがあるといふのだらう。

「ワグネル君、正直に言つて成功したまへ。」

決つて鈴を振りならす莫迦者にはなり給ふな」といふファウストの呟きの方が、僕達には、よほど有難いのだね。

疲れて來た。いづれ又書かう。君も書いてくれ。

昭和21年6月1日、通巻第3号

ひやうひやう

…暖鳥集前月評…

成田千空

私はかういふことに心掛けてゐる。まづ自分が正直に感じたものを、一應正直に表すこと。この正直に、といふことに何か郷愁に似た切ないきもちを持つ。といふのは逆に言へば私自身今迄、そして今も、いかに多くの眞

似事をくりかへしてゐるかといふことの証左になるのではないかと思ふ。いやなことである。いやなのは、眞似事（流行）が眞似事に終つてゐる場合が多いからである。誰でもない。この自分が作つた句に、自分が出てゐないとすれば、その邊にころがつてゐる十把一とからげの雜把木と何の變るところもないのである。

と言つて、私は必ずしも眞似とか作意とかを排するものではない。いや、むしろ現代の多くの俳人達が、こゝにいふ藝術上の大きな問題をいとも簡單に見捨てゝゐる態度に不満すら持つてゐる（この事についてはいづれあらためてのべてみたい氣持がある。）たゞ、私が今こゝで言ひたいのは、その人ながらのこゝろ（まこと）は眞似、作意の中に於てすら光りを放つといふことである。といふのは、「まこと」に依つて、その人獨自の作意を生み又、他人の眞似出来ない眞似をもなし得るからである。「新しみ」といふものは、案外その邊にもあるのではないか。それほどに「まこと」は無限の廣さと力を持つ。とすれば何もかも己れの生き身のこゝろ（まこと）をぶちまける以外に、いきいきした句は生れて來ないだらう。

あきつ群れて峽の夕日をあふれしむ 草 生
この「あふれしむ」と見たところに、この作者の生きの身の心の躍動があるのである。

蘆の葉を噛みつゝ川のほとりゆく 蓮 子
こゝにもまた「まこと」の光りがある。

何でもなし。これだけのことである。が、これだけのことで、そのものに詩がある。それを作者が見出してゐるのである。他所見（よそみ）をしてゐない作者そのものの言葉が、さわさわ風にゆれる蘆の葉（あし）ずれさへも吾々の耳に聞かしてくれるのである。

そこで私はオスカーワイルドの言葉を思ひ出す。
「言はなくとも存在してゐる世界に對して、言はなくてはわからぬ世界がある。これが藝術といふものだ」左

様。が然し、われわれは、言はなくても存在してゐる、と思ひ込んでゐる。世界の中に、いかに多くの言はなくてはわからぬ世界を見のがしてゐる事かと思ふ。
「勤めず心をこらさざる者、變化を知るといふ事なし」といふ芭蕉の眞意もこの邊にあるのではないかと思はれる。

温泉の香身にしつゝ夜霧の海に出づ 冬 樹
秋の雨引揚人を濡らしゆく 英 子
山ひだに人住む燈秋來たり 岩 雄
初茄子あをく弟の一年忌 富 子
これらの句はみなとにかく心をこらしてゐる。よそ見をしてゐない。正直に感じて正直に言ふべくつとめてゐる。これは尊い態度だと思ふ。

夢さめて花瓶に菊の白きあり 英 子
濯ぎつゝ紫蘇のうつり香ふときゝぬ 蓮 子
この感覺には「まこと」の光りがうすい。この人のものでないやうな、どこか心のあそびがある。足が地についてゐない感じなのである。

秋暑し母のみ骨をかるしとも 秋 穂
この「かるしとも」といふうまさ、かへつて、この場合この句の欠點になつてゐるのではないか。

風に立つ萩いみじくもこぼれけり 柳 之
これは又いみじくも見たものであるし、一應の成功をおさめてゐるが、この「いみじく」をもう一步具象化してもらひたいのである。

水捨てゝ叢月をひそめけり 岬 人
このうまさは私にも共感出來るが
母のあと走り行く子に蝗飛ぶ 悦 榮
繕ひのくづ糸そゝと秋の風 作 智 子
葦の香指にのこりて灯る街 不二浪
秋祭白き鳥居をくゞりけり さとし
顔洗ふ今朝の冷さ文にしぬ 爲 太

などにより、淨らかな眼を感じる。これは或へは青草さんのきびしい、然も、しんせつな選のたまものかも知れない。めいめい勝手氣まゝに青草さんにぶつかつて行つていゝのだと思ふ。

芭蕉は、己れの一句一句すべてこれ辭世だと言ひ切つた。それは然しあやしいものだが、よきにつけ、あしきにつけ、この己れの誠が打ち出したものを辭世と云はずして何を辭世といふのだらう。俳句も又ひとりの道でなければならぬ。

切に自分を大事にしたいものだと思ふ。

昭和21年11月30日、通巻第8号

自分のこと・人のこと

成 田 千 空

S さん

月評、とてもまとまりそうもなく、手をあげました。僕の今の生活がいけないのだと思います。せつば詰つて開業して、こんどは開業當時のどつさりの負擔の重さに、營々と日夜働ねばならぬ、その雰圍氣が、とても濁つていて、いけないのです。

○

ところで僕の俳句ですが、これはまた、俳句なのか俳句でないのか、わからなくなつて來ました。

俳句とはこういうものだという俳句の本質の究明は、今の僕にはだんだん第二義的な努力になつて來ています。若し、かりに、ある人間の誠實な考えが俳句に盛りきれないとして、この場合、俳句というものは斯ういうものだといふので、その盛りきれないものをすつかり捨て、俳句を作るといふわけにゆくでしょうか。これは明らかに俳句青年的な考えではなく、文學青年的な考えだと

思います。よしあしは別にして、事實、俳句をつくる僕らの世代は、俳句青年というよりも、だんだん文學青年的になつて來てゐるのではないかと思います。俳句を愛してゐながら、反面、俳句に嫌氣がさしてゐる二重性。自分の俳句が、俳句なのか俳句でないのかわからないゆえんです。たまさか、俳句らしい俳句が出來たと思つても、二た目には嫌になつてしまつて、むしろ、破れかぶれの俳句に強い愛着を覺えます。下手くそでも己れの生き身の誠實な眼の跡が残つてゐる作品に愛着を覺えるのです。

この事が俳句を進歩させるのか、停滞させるのか、わからないけれども（そして、この問題も、今の僕には第二義の感が深いけれども）確かに言ひいることは、古い人々も新しい人々も一應こゝに立ちかえる必要があるのではないかという事です。つまり、すでに手垢がついてしまつてゐる感じの、「いかに生くべきか」の場に、遅ればせながら立ちどまることの必要さです。「いかに生くべきか」という場合は、僕はアンバラスの場だと思ひます。芭蕉には元祿でのアンバラスがあつたと思ひますが、現代の俳人の多くは利巧に現實とのバランスをとつていて破綻がなく、人間が感ぜられても、前を向いてゐる人間が感ぜられないということになつてゐるようです。だから俳句雑誌の中で俳句を見てゐる限りでは、うまいなあと思う俳句でも、「現實に生きてゐる。生きたい。どういうふうに。何のために」というわれわれの日常の苦惱の場からは、おそろしく小つぽけなものに見えてしまふ。この点に關する限り、僕は今でもあの教授連中に賛成です。たゞ、彼らの言え分は、例えば、出來の悪い學生に向つて、「お前は出來が悪いから學校なんかやめてしまえ」というのに似てゐて、否定が否定に終つて（注つてゐる）所が不満なわけです。

まあ、それは描いて、僕はやはり第一義の生き方をし

たい。（こゝを押すゝめて、俳句では駄目だという確信がついたら潔く俳句から別れよう。というのが僕の個人的な考えです。間違つてゐるかも知れませんが。しかし誠實に俳句にぶつかつてゐる以上仕方ないことだという感が深いのです）。この考えを僕は故意にカツコでくるんで置きました。つまり、僕は俳句を愛してゐるから。

○ ところで、僕は最近自分の初心の頃の句を少ししらべてみる積りで、古い句帖をひつぱり出して見たのですが、ずらりと書きつらねた句の、あまりの薄のろさに狼狽し、切々とやるせなく、それから觀念の眼をつむつて莫迦笑ひが出來ました。なつてないのです。ヤブニラミものを見たり、甚だしきはウソ眼をつかつてもを見たり、とんでもない句に二重マルなんかつけていました。しかも悪いことには、その二重マルは、あきらかに當時のセンチからおほめを戴いたりしたものだつたので、二重に悲しかつたのです。つまり、本當の自分の眼で、ものを見てゐなかつたという發見が、いちばんの打撃だつたわけでした。過去の己れの句に接して、どういう氣持で作つたのか、少しもその痕跡が見えないということほど作者にとつて不名誉なことはないと思ひます。つまり、僕が育つた當時の俳壇の結社というものが醸し出している薄靄の中で、結局何も掴むことが出來ず、のほほんと、おほめにあずかつたり、お叱りを受けたりしてゐた僕の過去がとても不愉快だつたわけです。だから僕は後進の人達に「何も信するな。自分の眼だけを信じたまえ」と云えたくまりました。

○ 暖鳥の新人の人達の句に僕はいつも注目しています。何と、僕らの初心の頃の句に比較して、疵だらけなことか、人間的なことかと思ひます。

向けた顔に言あるらしく夜の秋 丰太

おゆびもておさえし螭螂腰が青い 誠一
花火盡きて皆病人となりて歩む 耕子
蔦からむ家系斷絶まぬかれず 翠峰
人間界の切符をもたでのこり梅雨 つよし
眞炎天どうして鶴嘴人へ打たず 白民
老農のうなじのくぼみ山瀬吹く 旺水
トマト紅し胸のふくらむ思ひごと まさ

句の高さという点から見たらお世辭にもほめるわけにはいかないけれども、この人達に關する限り、僕が過去の句に接して覺えた不愉快さというものを、あまり感じないで済むのではないかと思ひます。
こういう句が暖鳥の新しい人達から生れるというのは、やはり暖鳥というグループの空氣のよさと、作者めいめいの意識の高さを物語るものだと思ひぬわけに參りませう。

○ ベテラン級については多言をしないことに致します。焼いてもこれ以上燒きが入る氣配もないし、たゞいてもこつちの手が痛くなるばかりですから。

無爲——この人の句は、この人が死んでから、だんだん輝きが出てくる感じであります。

翠雨——第二藝術的うまさ、まさに天下一品の感。
菁實——自意識の脂つこさ。或いは聰明さからの復讐。

思水、行思——俳句は悲しみの表現に適してゐる事實は、悲しんでいゝのか、喜んでいゝのか。
忠一郎——復活を喜びます。不幸が又、この人に俳句をつくらせたのかも知れませんが。僕は、「蚤のあと木蔭にあれば悲しかり」がいちばん心に沁みました。

○

最近の句帖から。

△不安——だんだん僕の句は血の氣がなくなつて来る。

△「新しいこと」と「珍しいこと」との混同。

△「降つて来たような言葉」と「湧いて来たような言葉」がある。

△引き返したら最後、時間に復讐される。

△與えられた。湧きいずる。生みだされたる。詩。

△熱がさめた時は、一人の凡物が残る。嚙言の記録が残る。

△石の上での瞑想はやめよう。

昭和24年10月号

季題に関する様々な想念の一つ

成田千空

〈原馬〉(注 うるぶふえると)が、俳句雑誌「萬緑」の表紙に現れたのは、確か同誌30号以来であつた。馬の頸部が眞紅の圓盤にくまどられて表紙全体が日の丸の旗の効果を

を出していた。ヘウル・プフェルトとは、セレーネ神の車を牽く四匹の馬の頭部の一つ。アテネのパルテノン神殿の群像中に混つていて、ゲーテがこれを「原馬」(UR PFERD)と呼んだのだそうである。

「この馬は、馬というものの特性を抽出したイデーを基として作出されたのではなく、人間の愛情と、藝術家の熱意とをもつて、内的にも外的にもあらゆる具体的な個物的な馬を観察する経験を飽くなく重ねつづけ、そして、あらゆる馬という現象の中に一個の中核現象を見抜いて表現したもの、即ち「馬なるもの」を見抜いて、それを如実に造形した(それ故にこれは「原馬」と称いられ得る——)草田男」と言はれる。もちろん、これは現実界そのまゝの馬ではない。しかし、現実界の如何なる馬より

も馬らしいや如何なる馬よりも馬になつてゐるということとは——、優れた女形は如何なる現実の女よりも女らしいと同じように、これは藝術というものの在り方を如実に物語る。

× ×

俳句に於ける「季題」は連句に於ける附合の「題」(発句の「季」)の約束から受けつがれた。連句に於ける附合の「題」とは「本意」のことであつた。「本意」とは、最も「そのものらしいもの」つまり、本質規定である。「最もそのものらしいもの」の表現は當然、中世の象徴藝術の世界につながりを持つた。月といえは秋。この分類感覚は莫迦にならぬ。そこで、現象に於ける最もそのものらしいものの把握が季題の方法であつたから我々が外側から「季題」というものを自然現象と規定してかゝつて、そこに束縛を感じ出したことは、本来の「季題」の性格とその方向に対して、逆な姿勢になつてゐる。つまり、中核現象の把握が季題というものの在り方であつたから、ものの中核現象を衝いて把握したその「もの」が「季題」であるといつてもいゝことになる。とすれば、「季題」というものは、只今の我々の通念になつてゐる束縛ではあり得ず、自在にものを見得る「場」として存在しなければならず、事実、斯様な「場」から生れた作品のみ藝術として通じてゐる。左様、何となれば「そのものらしいもの」を見得る「場」は「自在」を要するから。その藝術表現は、俳句では必然的に象徴の形をとつた。

この「季題」の創意は當然、秀れた藝術家を要した。そしてその藝術家に依つて本質を衝かれた「季題」(ある意味、創造された「季題」)は、その後を迫(注 迫う)數多の凡俳人に依つて、季題趣味というものに變貌し、魂を失つた。そのうちの、ある者は「季題」というものがあるから「趣味」に惰するのだと早合点した。これも逆であ

る。「季題」は「ものの本意を盡すべきが、その發生的性格であるから、従つて、時代にも没交渉であり得ないし、必ずしも自然現象と規定するのも、狭い考えのように思われる。「ものの本意を盡すもの」。これは、今迄在るものより在り得べきものに作家の生命が懸けられねばならぬことを物語る。即ち、「季題」というものは、作家に依つて創造されなければならず、それ故にこそ「季題」だと言はざるを得ない。

× ×

連歌に於ける第三句は「戀」である。ところでこの「戀」の本意は「人を戀いあぐがれて及びがたなく、身も玉の緒も絶入るように思う心」——(産衣)であつた。それは、その時代の藝術家の、戀というものの、最も戀らしいものを感じとつた本意であつた。これは、そのまゝ、徳川三百年の時代表象を成している。これが日本古代に遡るとどうなるか。萬葉はいゝ手がかりになる。

君がゆく、ながてのみちを繰りたゝみ、
焼きほろぼさむ、あめの火もがも

くさまくら、旅のまろねの、ひもたえば、
吾が手とつけろ、これのはる持し

めくらはしべのをとめ

という。の戀情、まことにうるわしく、すさまじいものがあつた。つまり、日本古代の「戀」は假に言えば「人を戀いあぐがれ、こころ焰と猛りて、あめのまほらにとどくべきを戀」ということになるであらうか。唯だ、ものの本意は、先づ、すべて作品が示していることを忘るべきでないし、そのものの本意は時代時代の作家の觸解が探知し、作家の肉体が表現するものであつた。

そこで「季題」というものの發生的性格からは、花鳥諷詠的なもの(自然現象的なもの)のみが、「季題」の本領であるという結論が出て來ないが故に、逆に、「季

題」というものを、自然現象（あるえは花鳥諷詠）の題として、規定してかゝつて、俳句の本質と切り離している論にも、この文章は賛成するわけには参らぬことになった。むしろ、俳句の持つ象徴的性格と、本来の季題というものの象徴的とは、不可分の関係にあると考えざるを得ないことになった。ひつくるめて言う、自然現象であれ、人間現象であれ、自在の「場」にものを見、そのものの中核現象を把握したそのものが即ち「季題」でなければならず、そのものの十七音律表現が俳句というものであると考える。

冒頭の〈REP. FELD（注 R. FIELD）〉は——。ギリシヤ藝術家の創造にかゝりゲルマン屬ゲートの命名になり、そいつを、現代日本の俳句作家がとらいて、日の丸の形に表現して見せた。古臭いだろうか。

昭和26年6月号

私信

成田 千空

川口 爽郎さま

お手紙及び御句集有難う御さいました。御句集の方はこれからゆつくり味讀致さうと思つてゐるところです。

實は只今の私、生活上の煩雜な間違が次々に起つて、精神的にかなり参つてゐますので、こゝ二ヶ月間といふものすつかり俳句に御無沙汰してゐるあんばいで、もう、あちこちに失禮ばかりしてゐる状態なんです。

それでも、たまには俳句でも作つて救はれたいと殊勝な考へも起るのですが、俳句は一片も出來ず、句帖はいたづらに落書でぬりつぶされるといつた鹽梅。こんなザマで御句集を批評するなど、オコガマしくて出來るものではありません。

○

この間、友人の畫家が、よつばらつて私の顔をスケッチして「あなたの顔は眼と口のバランスがとれてゐない」と無邪氣に言つたので、ドキツとしました。だいたい私は、終戦以來、津輕の山里にひつ込んで全く自身身に閉ぢこもつた生活を四年間も送つて、謂はゞ「獨りごと」ばかりつぶやいて参つたわけですが、だんだんやりきれなくなつて、強烈にダイヤローグの世界に自分を開放したく、本屋開業もその自分を救ふ手段の一つだつたのですが、最近、人と人との關係の中に、「口は明るく、眼は暗い」さういふ自分といふものを確めたところから、私の再度の苦しみがはじまりさうなのです。ルオー。中原中也。あの山々はあきらかに私どもに裾をひいてゐるのですけれど、あの人達だつて、現實的にはちつとも救はれてゐない氣がします。

私は自分と逆な方向の世界に頭を突つ込んでみたい。なぜなら自分自身にいちやつゝいてゐるかぎり私は助かりさうもないから。環境によつて人間が何とかなるものなら、その環境を自分の力で何とかしてみたい。抵抗にぶつかつて、突き飛ばされ跳ね返されるかなしび——（大げさな言葉で恥しい）——そいつが只今の私の場のやうです。しかし、こゝいふ場から俳句表現することは、もう私の鼻についてゐるものですから、句帖をひらけば落書になつてしまふわけなのでせう。それでも試みはいろいろやつてゐるつもりなのですが駄目です。

只今の私の關心事は人間の生き方の問題だけです。だから私の眼からは、例へばお手紙の、

階段を上るや 一歩 一歩 寒し 爽郎

の「寒」しがどうのこうのといふ問題は殆んど無縁に近いのです。あの批評は誰が書いたのか知りませんが、これも、こゝいふところにばかり眼を皿にする批評が俳壇には少し多過ぎやしないかと思ふし、それを一々氣にする

必要も私はあまりみとめません。いや、これは言葉が少し過ぎる。つまり、こゝいふところにこだわつてゐる間に、作家の人間の（在り方の）問題を忘れる危険がありやしないか懼れるといふわけです。

現實の生活でちつとも救はれないところを、藝術に託することに依つて救はれる在り方が、今までの日本の藝術の大方だつたやうな氣がします。まあ、「悲しき玩具」などといふ言葉の生れたゆゑんなのでせう。しかし、どうも私などあまり身近かなせいもあつて、イヤな氣がします。そこで、また大げさな言葉になりますが「人間革命」といふ事が大變な魅力になつて來る。しかし大變だ。大變だからやつてみたい。

○

ある日、私は家の中から、道路上の馬糞の山を見てゐました。そこを女の人がひとり通りしました。女の人はちらりと私の方を見ました。と、女の人は確かに私に注視されてゐると思つてゐるやうなそぶりで行き過ぎました。しかし、私は實は道路上の馬糞のことで頭がいつぱいなのでした——

こゝいふ次第でいゝ俳句がなかなか出來さうもありません。したがつて人の俳句についても、つべこべ言ふ氣も起りません。しかし御句集については一度何か書いてみる氣もありますから、機會と落付きに恵まれたら、あらためてお返事を果したいと思ひます。

○

苦しまぎれに何だかん注だか非禮な言葉を連ねた氣が致します。悪しからず御容赦下さいまし。

昭和25年6月号

千空さんを識る本

千空俳句は難解だといわれますが、亡くなられてから刊行された本は、選句集や脚注句集、エッセイなどでわかりやすいので、一読をお勧めします。入手できないときは図書館でも閲覧できます。
(価格は税別)

成田千空『俳句は遊びの文字』角川学芸出版

俳句雑誌に掲載されたエッセイ集 2200円

萬緑会編『成田千空集』脚注名句シリーズ 俳人協会

萬緑の友が脚注を添えて理解を深める 1143円

『成田千空句集』東奥文芸叢書 東奥日報社

6冊の句集と未収録作品からの選句集 1200円

成田千空『中村草田男訪問記』青森文芸出版

若き日に師草田男を訪ねた感動の記録 463円

寄贈感謝

尾崎西蕉さん(青森市)

句集『海流』刊行記念写真 1枚

*昭和19年、吹田孤蓬居で撮影した青森俳句会の貴重な1枚。

西谷ともえさん(青森市)

俳句「青森空襲」13句 成田千空

(『青森空襲の記録』コピー)

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)
2. 回想の成田千空(2000字以内)

締め切り 第7号は7月末、到着順に掲載します。

* 稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

* Eメールで送信くださる場合

sasaki@abungei.co.jp

会員名簿(45名)

〈青森市〉浅利康衛、高森ましら、成田奉生、西谷とも

え、野沢省悟、未津きみ、吉田州花

〈平内町〉佐藤陽子

〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、

鎌田義正、後藤隆、館田勝弘、土田紫翠、三上弘之

〈藤崎町〉清水雪江、世良啓

〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉日野口晃、米田省三

〈五所川原市〉一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗

子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、

高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、

山内ひろ子

〈板柳町〉木村武彦

〈中泊町〉外崎文夫

〈つがる市〉兼平一子

〈深浦町〉草野力丸、山本こう女

〈盛岡市〉瀬川君男

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

☆北極星☆

○偶然の出会いから齋藤美穂さんへ届けられた1枚の写真。それは昭和19年に撮影された青森俳句会の合同句集『海流』出版記念会のもの。所蔵していた尾崎西蕉さんは千空さんとともに出句者だった。謎が多かった句集も写真から多くのことが判明した。くわしくは2ページをお読みいただきたい。

○ネットで千空句のパロディを見つけた。

大粒の飴売る青田母のクニ ちえ

俳句の街まつやま 俳句ポストが、2014年にNHKラジオ第2「私の日本語辞典」で放送されたもの。

原句は「大粒の雨降る青田母のくに／成田千空」。なんだか原句に申し訳ない…でも、青田クニさんの飴、食べてみたい♪今回ギャ句に初挑戦しました。

／ちえ

というコメントまである。千空俳句が認知されてきたことの証だろう。

○1年もあれば資料の整理は終わるだろうと思ったのは甘かった。登山に例えるとまだ3合目あたりか。データベースも1万3500句ほどになり、検索が便利になったが、まだ頂上ははるかである。

2016年5月20日発行

会報『千空研究』第6号 非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355-5323
FAX 0173-355-8414